

【提出意見】

岩戸 晶子（奈良大学）

議題1 課題を追究・解決する活動の充実について

・中山先生のご指摘とも重なるが、知的財産に関する知識については、児童の発達段階に応じて体系的に指導する必要があると考える。近年、単なる知識量においてはAIが人間を上回る場面も増えている一方で、知識をもとに考察する力については、なお人間に優位性がある。この点を児童に適切に伝えることが重要である。

また、インターネット上における筆者不詳の文章と、研究者による学術的文章との違いも、こうした観点から理解させることが可能であろう。加えて、AIに対する正しい理解を促す教育も必要であり、その基盤として知的財産への理解と尊重の態度を涵養することが、今後一層重要になると考える。

なお、参考として、博物館勤務時代には、事前調整を欠いたまま教員主導で学芸員や研究者に調査を委ねる、いわゆる「丸投げ型」の調べ学習が見受けられた。例えば、事前連絡のないまま、1クラス40名程度から「大仏について教えてください」といった同一内容の質問が一括して送付される事例である。このような実態も踏まえ、知的財産および調査の在り方に関する教育の必要性は高い。

・発信に対する責任についても、併せて指導すべきである。AIを活用して情報収集を行う場合であっても、最終的に発信する内容については、自ら情報を取捨選択し、理解したうえで、発信の責任を負う必要がある。この点を明確に指導することにより、不確かな情報が拡散されがちな現代のSNS環境における課題の改善にも、一定の効果が期待できる。

・歴史学の立場からは、資料中（p. 3）において「資料の限界」に言及している点は評価できる。ただし、「資料の限界を読み取る」としているものの、児童が自発的にそれを行うことは容易ではなく、教員による適切な指導とトレーニングが不可欠である。

また、歴史学・考古学においては、「存在しないこと」を証明することの困難さ、現存資料のみに基づいて歴史像が構築されていること、さらに新資料の発見や研究の進展によってその像が大きく更新され得ることを理解させる必要がある。これにより、断定的な判断の危険性や、多角的な視点の重要性への認識を促すことができる。あわせて、他者の立場を踏まえた議論の構築についての学習も組み込むべきである。近年、大学においても、他者の発表への関心の低さや断定的発言により、建設的な議論

が成立しない事例が散見されることを踏まえると、この点は初等中等教育段階からの対応が求められる。

議題2 系統性・体系性等の整理について

・ p. 39 の「※課題解決・新たな課題：探究的に学習した結果を表現し新たな課題に向かう場면을創設」については、おおむね賛同するが、「新たな課題」という表現よりも「探究をさらに展開する」といった表現のほうが適切ではないかと考える。探究の成果を深化させる場合や、関連する隣接領域へ展開する場合など、学習の広がり方をより具体的に示す表現とすることが望ましいのではないか。

● 総論的意見として

根本的な論点として、学習指導要領において定められた学習目標が、学習者である児童・生徒に十分に共有されているかについて、その必要性が小中高の教育現場でどうとらえられているか疑問がある。大学教育においては、シラバスや初回ガイダンスにより、授業の目的や到達目標が明確に提示される。一方、小中高においては、こうした体系的なガイダンスが十分に行われているとは言い難いのではないか。

歴史・地理・公民等の学習を通じて、どのような能力が育成されるのかを、発達段階に応じて明示し、学習者自身が学習内容と目的を自覚したうえで授業に臨むことは主体的な学習態度の育成により効果的につながると考える。

社会科の科目内容が依然として暗記科目であるとの誤解が広く存在する現状を踏まえると、これらの教科を通じて身につけるべき資質・能力や、目指すべき到達点をあらかじめ示すことは、教育的効果の観点からも重要であると考えられる。